# 千刈狸の呟き

## ～ コロナ後の医療、コロナに対してどう向き合うか？ ～

黄 昏 狸

今、医療関係者は新型コロナ感染の恐怖の中で使命感を持って日々戦っています。その中で医療関係者への誹謗中傷などがなされ、それを聞くと悲しくなってしまいます。私たちは自分自身が「尊重されるべき存在」であることを忘れてしまい、知らず知らずのうちに自分自身や周りの人をぞんざいに扱ってしまうという悪循環が今まさに、私たちの社会で起きているように思います。

そして、新型コロナ感染症は今までの医療の姿を大きく変えるでしょう。コロナに打ち勝つのではなく共存（ウィズコロナ）への発想の転換が必要であると思います。私たちには「新型コロナウイルスに対してどう向き合うか」という究極の選択の自由があります。つまり、変わらないといけないのはウイルスではなく「私たち」なのかもしれません。それは、従来通りの医療を提供することは困難であるということを意味します。医療機関から収入減の悲鳴も聞こえてきていますし、医療経営の改革も求められています。地域ではコロナのための発熱外来や検査センター、場合によってはコロナに特化した専門病院なども設置され、医師の働き方や配置も変わってくると思います。

患者さんにとっては、通院や入院に至るまで、治療のあらゆる面が変化するのは明らかです。これからはコロナと共に新しい生活様式に応じた適切な疾病予防と生活習慣と新しい診療が望まれます。コロナの感染予防策として、皆がマスクをつけて、３密を避けるなど、医療においてはどうしても今までの対面診療とは異なる適切なICTやオンライン診療がカギとなりそうです。つまり、これからは住民と共に患者さんが選択する新たな医療と上手な医療のかかり方も一緒に考えていかなければいけないと思います。

医療の上手なかかり方として、かかりつけ医と連携して患者を円滑に受け入れるなど、高齢者の医療ニーズに応える新たな病院機能の整備や予防医療の推進による高齢者の社会参加、特に秋田では医師不足や医師の偏在もあり、過疎地や豪雪地帯においては、遠隔医療や医療・介護情報の共有化などを組み合わせた医療サービスの提供も必要で、医療に対する地域住民の意識の醸成も重要となります。

大切なのは、「医者が何をやりたいか」ではなく、「地域が何を求めているか」、「安心できる医療とは」を受けとめて体制整備をしなければ、いずれは大きな人口変動の荒波にのまれてしまうでしょう。できるだけ推計結果をオープンにし、そこにある意味を多様な住民との対話のなかで見出しながら、多重分散的な社会をデザインしていく姿勢（思想）が求められているのだと思います。

しかし、注意しなければいけないのは、デジタルも重要であるがアナログも大切であるということです。そもそも人間はアナログ的なものです。これからは両方のバランスをとった治す医療から支える医療、終末期の在り方、Advance Care Planning（ACP：人生会議）も並行して検討していかなければいけないと思われます。アフターコロナの時代では住民と共に私たち医療者が地域の医療を守るという「共感」をそれぞれの地域に浸透させていくことが最も優先されるべきことであると思います。

そして、さらに大切なことは、私たちがコロナにどう向き合うべきかを考えることです。私たちは、「変えられないもの」と「変えられるもの」を見分けられるか否かが、私たちがこの長い闘いを続けていけるかのカギになります。そのカギとなるのが、アメリカの神学者ラインホルド・ニーバーが語った「ニーバーの祈り」です。彼は、「神よ、変えることのできないものを静穏に受け入れる力を与えてください。変えるべきものを変える勇気を、そして、変えられないものと変えるべきものを区別する賢さを与えてください。一日一日を生き、この時を常に喜びをもって受け入れ、困難は平穏への道として受け入れさせてください」といっています。これを読み解くと、コロナが本当の悲劇なのではなく、真の悲劇は、私たちはコロナに怯え、頭が一杯になり、支配され、コロナによって自分らしく生きることが出来なくなることだと思うのです。私たちはこれからもコロナと戦い、コロナに打ち勝つためには自分自身に打ち勝ち、ある意味ではコロナを受け入れて、コロナ後の世界を共に生きていかなければいけません。これから秋田県（わが地域）でも新型コロナワクチン接種が始まります。その効果に期待し、何とか皆で頑張ってこの困難を乗り越えていきたいものです。